

「目立たない配慮」にこそまちのやさしさが宿っていた

大阪府立工芸高等学校 3年

まつ お
松尾 薫

バリアフリーというと、エレベーターや点字ブロック、スロープなどがすぐに思い浮かぶけれど、今回の課題をきっかけに、私はもっと目立たない小さな工夫に目を向けてみることにした。誰も気づかないような、けれど確かに“誰かのために”用意されたやさしさが、まちにはきっとあるはずだと思ったからだ。

通学路の途中、何気なく通り過ぎていた地下鉄の出入口の近くに、それはあった。地面に埋め込まれた細い金属の溝のようなライン（写真1）。最初は「なんの意味があるんだろう」と思っていたが、調べてみるとこれは「視覚障がい者誘導用鉄」といって、白杖でたたくと音が返ってくる素材になっているそうだ。点字ブロックが敷けないスペースにこうした素材を使うことで、音や感触で方向を伝えているのだという。

さらに、地下鉄天王寺駅のきっぷ売場で見つけた券売機にも、やさしさが隠れていた。よく見ると、ボタンの横に小さな点字がついていて、横には音が出るスピーカーが付いている（写真2）。実はこれは、視覚に障がいのある人が使いやすいように設計された「音声案内付きの券売機」だった。見えている人には何でもない普通の機械だけれど、見えない人にとっては「どのボタンを押したか」「操作がうまくできているか」がわかるように工夫されている。言わなければ気づかないよう

な配慮だけど、こうした仕組みがあることで、一人で公共交通機関を使える人が増えるんだと思うと、ものすごく大事な工夫だと感じた。

それから気を付けて歩いてみると、バス停の時刻表の下のほうに、小さなQRコードと「音声案内」のシールが貼られているのも見つけた（写真3）。スマートフォンで読み取ると、音声読み上げでバスの時刻を教えてくれる仕組みだった。高齢者や目の不自由な方がスマホを活用して情報を得る工夫だが、あまりに小さく表示されているため、気づく人は少ないかもしれない。でも、そういうさりげない気遣いこそが「まちのやさしさ」なのだと思った。

まちの中には、決して目立たない、誰かの目線にそっと寄り添ったような工夫がたくさんある。私たちが普段見落としている場所にも、「使う人」が本当に困らないようにという思いが込められていることを今回のレポートを通して初めて知った。「やさしさ」は必ずしも派手なものではない。むしろ、本当に優しい配慮ほど、気付かれないところにあるのかもしれない。これからは、見慣れた風景の中に隠れているやさしさをもっと探していくたい。そして、どんな立場の人も安心して暮らせるまちに、自分も関わいたらと思う。



写真1 天王寺駅地下



写真2 天王寺駅地下の切符券売機

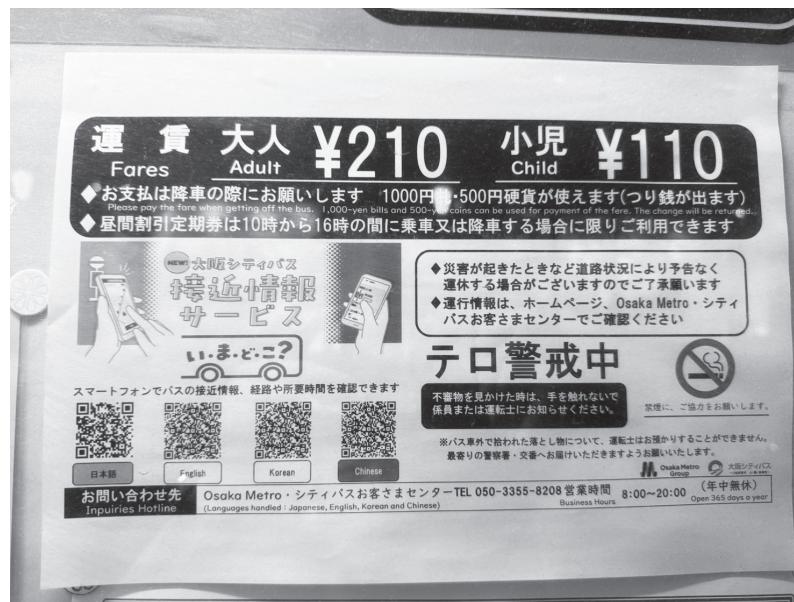


写真3 天王寺駅バス停